

令和5年度 第2回宮城県産業教育審議会会議録

宮城県教育委員会

I 日時 令和5年12月19日(火)
午後1時30分から午後4時10分まで

II 会場 宮城県大河原産業高等学校
柴田郡大河原町字上川原7-2

III 視察
大河原産業高等学校 視察 午後1時40分から午後2時50分

IV 次第

1 開 会

2 議 事

(1) 学科間連携や地域連携をおこなうことで望める、専門高校の学びについて

3 その他

第3回産業教育審議会日程について

4 閉 会

【資料一覧】

資料1 産業教育振興法(抜粋)
産業教育審議会条例・産業教育審議会規則
情報公開条例(抜粋)
資料2 令和5・6年度 宮城県産業教育審議会のスケジュール
資料3 宮城県産業教育審議会 意見用紙

別紙資料

(進行)
事務局 伊藤総括

本日は御多用のところ第2回宮城県産業教育審議会に御出席いただきましてありがとうございます。前回に引き続きまして、どうぞよろしく願いいたします。日程は「次第」に記載のとおりです。

視察にあたりまして、事務局から説明申し上げます。

事務局 関

本日は、よろしく願いいたします。早速ではございますが、視察にあたって説明をさせていただきます。

大河原産業高校は、農業科学科、企画デザイン科、総合ビジネス科を有した産業高校で、県内で唯一企画デザインの学びを有している多学科制専門学校です。教育目標として「協働して新たな価値を生み出す創造性を身に付けた各分野のスペシャリストの育成」、「地域社会の発展に寄与する人材育成」等を掲げております。本日は、CGデザインの授業や農業系の授業を見せていただくことになっております。

視察の後、「学科間連携や地域連携をおこなうことで望める、専門高校の学びについて」という議事で御意見をいただく予定としております。

学科間や地域連携をおこなうことで、生徒の学びの姿がどう変容するか将来の姿をイメージしながら、少子化に向かう専門高校の在り方の審議を進めていきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

なお、この会場は施錠いたしますが、念のため貴重品はお持ちください。また、写真の撮影は構いませんが、できるだけ生徒の顔が映りこまないように御配慮願います。

事務局 伊藤総括

今の事務局からの説明に、ご質問はございませんか。

では、ここからの案内は大河原産業高校の伊藤 直美 校長先生、大澤 健史 教頭先生をお願いいたします。委員の皆様は御準備をお願いします。

< 視 察 >

1 開 会
(進行)
事務局 伊藤総括

改めまして、委員の皆様、本日はご多用のところ御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、令和5年度第2回宮城県産業教育審議会を開催いたします。

本日お配りしております資料は、次第、名簿、会場図の他、ダブルクリップで綴じている資料です。右肩に四角囲みで資料番号が振ってございますが、資料1から3、それから前回の審議会における委員の先生方の御意見をまとめた別冊資料となっております。

追加資料として、大河原産業高校の「学校案内」、「学校要覧」、「学校紹介資料」、県経済商工部の産業人材対策課より「オガーレ! ACE 38号」を配布しております。

本日の日程は、配布しております次第のとおりでございます。終了時刻は午後4時を予定しておりますので、よろしく願いいたします。

なお本日は、宮城県商工会議所連合会 常任幹事 今野 薫委員、宮城県中小企業団体中央会 専務理事 半沢 章委員、東北大学金属材料科研究所 教授 梅津 理恵委員が欠席となっておりますので、御報告いたします。

では、開会の挨拶を伊藤 房雄会長よりお願いいたします。

会長 伊藤房雄

皆様、お忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。本審議会の目的については、いつもお話しさせていただいておりますので、割愛させていただきます。

今年度は、前回話題にした通り、急激な少子化に対応した具体の提言につなげていくため、少しタイトな日程となっておりますが、2回目の本会は、開校したばかりの大河原産業高校にお邪魔して授業や施設設備を見せていただけることで、非常に楽しみにして参りました。おそらく、委員の皆様方も私と同じ気持ちではないかと推察します。

私の専門は農業経済ですので、高等学校の農業科と商業科がどう連携しているのか、特にデザインという今までにない学科もあり、非常に興味深く伺いたいと思っております。また、地域社会との連携はどうか、そして「協働して新たな価値を生み出す創造性を身につけた各分野のスペシャリスト育成」という教育目標をどう授業に落とし込んでいるのか、興味を持ってまいりました。

今日は、先ほど教室を見ながらいろいろな説明を聞き、委員の皆様におかれても様々な感想をお持ちになったことだと思います。

これから限られた時間となりますが、委員の皆様方には、将来、宮城でいきいきと活躍する産業人材を育てる教育へどのような支援が必要なのか、大河原産業高校で取り組んでいることをどのようにして伸ばしたらいいのかといったことも含め、忌憚のない御意見をいただきたいと思っております。どうぞよろしく願います。

事務局 伊藤総括

ここで教育委員会の主な出席者を紹介させていただきます。宮城県教育庁高校教育課長の遠藤 秀樹でございます。

**2 議事
(進行)**

事務局 伊藤総括

ここから審議に入ります。産業教育審議会規則第五条に基づき、審議会会長の伊藤会長に司会をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

議長 伊藤会長

はい、これからしばらくの間、議長を務めてまいります。皆様の御協力をよろしくお願いいたします。先ほども挨拶で申し上げましたが本日、大河原産業高校を視察させていただきました。それで御挨拶も兼ねまして、伊藤 直美初代校長から補足説明等をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

校長 伊藤直美

委員の皆様、本日はようこそお越しいただきましてありがとうございます。実は私、3年前に高校教育課におりまして、この産業教育審議会の担当をさせていただいております。当時から委員をお引き受けいただいております皆様には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

大河原産業高校ですが、概要は資料を御覧いただければと思います。隣にあります柴田農林高校それから大河原商業高校を再編統合するような形で、この4月に開校したばかりで、1年生のみが在籍している学校です。この審議会の最初のところで、高校教育課の関 課長補佐から説明があった通りでございます。資料を御覧いただければと思いますが、今、会長さんからお話もありました地域連携の部分はどうなっているのかということですが、今、視察していただいたように1年生のみでスタートしたばかりですので、実際にはこれから動くということ、その足を一步踏み出したところになるかと思っております。具体的などころでは、資料の後ろからめくっていただいたところの、3の連携についてというところで簡単にまとめさせていただきます。

先ほども御覧いただきましたが、学科間連携というところで既にスタートしているのは、農業科学科と企画デザイン科のポップ作成というところにおいて、始めたところですが、やはりこういったデザインとか絵を描くのがと

でも得意だったり、好きだったりという生徒が企画デザイン科に多く在籍し、また、4月から少しずつイラストレーターというソフトの使い方、なかなか難しいものですが、一生懸命に学んでいるようでございます。そういったものを駆使して、個性溢れるデザインを作成しまして、販売活動等の取組を始めております。

また、地域との連携については、まだお世話になっているというような部分になりますけれども、仙南あるいは大河原地域を中心に様々な分野で志を持って活躍していらっしゃる方々がいらっしゃいます。そういった方々のお話をまず聞くというようなことを企画デザイン科やあるいは、総合的な探究の時間において行っています。御存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、大河原にあります「もちぶた館ヒルズ」で、豚の生産、加工品の販売、そしてそれらを組み合わせさせてレジャー施設の運営ということをやっております、非常に家畜の生産販売というのは大変な仕事ですけれども、できるだけ臭いを出さないような飼育方法をしたり、糞尿を使って堆肥を作り、その堆肥を地域の農家に無料で配ったりしています。そこで生産した野菜をまた「もちぶた館」で販売をしています。また、「もちぶた館」では、温泉も一緒にやっていて、レジャー産業の1つとしても繋げているといった企業で、そのような施設が近くにあることは、非常に参考になると思っております。あるいは、八重樫工務店というのは、この大河原にある工務店ですけれども、住宅販売など広く不動産業をしている会社で、地域の活性化ということを考えていらっしゃる社長でございます。また、県の大河原合庁にあります大河原地方振興事務所では、「せんなんマルシェ」という企画を行いまして、1回目の10月のところで本校のスペースを設けていただき、本校の農産物を販売しながら、学校の紹介をさせていただきました。実は今週の金曜日にも第2回目の「せんなんマルシェ」がありまして、声を掛けていただいております。今回に関しましては資料にありますとおり「せんなんマルシェ」のチラシ制作をやらせていただいて、企画デザイン科で考えたチラシが世に出ているということになっております。

以上のように、学科や地域との連携を始めたばかりではありますが、実は地域の皆様も本校に期待を寄せていただいているということで、そういったお声もたくさん頂戴しております。今後、専門の学習を深めていく中で、より深い内容、あるいは、企画デザイン科などを中心として、単なる「モノ」のデザインというよりも、地域のデザイン、地域をどうやって活性化していくかといったことも含めたデザインということに、3年間の中で繋げていきたいと考えております。

それから資料の右のページにございますが、柴田農林高校は、年次進行で人が少なくなっていくというような状態でございますが、先ほどご紹介しましたように、共有しているスペースもたくさんございます。また、両校の関わりの中では部活動を合同でやって、それは大河原商業高校も同様ですが、一緒に部活動に取り組んだり、あるいは、もともと農業をベースとした学校でございますので、農業クラブ活動という活動が農業高校でございますが、そちらの活動は本校の農業各科の1年生と一緒にやらせていただいているというようなことでございます。それから今日、皆様の机の上に先ほど御覧いただいた一味唐辛子の製品の1つで一番辛い大ハードというものを置かせていただきました。ぜひお持ち帰りいただいて、御賞味いただければと思っております。これらのラベルも企画デザイン科が考えたものでございます。今回は超辛のものでございますので、注意していただきながら、お肉の料理にすごく合うらしいです。あとラーメンなどにもかけてもいいようです。ただ最初は、本当に少量から始めていただいて、ということで、このようなことも行っております。今現在は柴田農林高校の3年生を中心に活動をしていて、企画デザイン科がラベルを作るというようなことをやっております。そういう意味では、まだスタートしたばかりということではございますけれども、可能性が広がるし、こういうこともやってみたい、ああいうこ

ともやってみたいということをお農業の教員と商業の教員が相談しながら取り組んでいるというのが今の状況でございます。長くなりましたが以上でございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。今3時を過ぎたところです。予定としては4時までということですが、皆さんから今日の視察で、思い浮かんだことや考えさせられたこと、感想などのコメントをいただきたいと思っています。

順番として、資料に委員名簿がありますので、その名簿の下から順にお願いしたいと思いますが、もう少し考えたいという時間が必要だと思われるので、私から順にお一人おおよそ5分程度で様々お話ししていただければと思います。

では、私から先にお話させていただきます。今、伊藤直美校長から学科関連、地域間連携の話がありました。それと、柴田農林高校との関係をお話いただき、皆さん御理解いただけたかと思います。それで今日は授業や施設を色々見させていただいて、今1年生だけなので、これから順次、学生を受け入れ卒業というところにならないとリアリティがなかなか持てないと思いますが、こちらで輩出する卒業生は、どのような進路になっていくのだろうか、そこは開校する前からある程度は想定されていて、おそらくそのまま産業界に就職していくと、あとは大学や各種専門学校に、さらに学びを深めるために進学といったところもあると思います。今日の授業で見させていただいたコンピュータグラフィックスなど高校で学ぶ内容は、おそらく専門学校で学ぶ内容との違いは当然あるわけで、そういったところの連携を当初から科目を設定する時に、検討しながら高校で学ぶ内容を決めていたのかをお聞きできればと思います。

また、デザインというのは本当に幅広いコンセプトで、先ほどご説明いただいた、地域デザインにおいても地域計画などのデザイン計画になると、実は事業そのものだけでなく、事業計画に必要な人員であったり、それを動かすための資金であったりと、様々なことを学んだ上で取り組まなければならないのですが、そこまで考えると、とても3年間では難しいと思います。こちらでこういったことを最低限ないしは身に付けてもらいたいと考えて、デザインという名前を付けているのか教えていただけないでしょうか。

校長 伊藤直美

ありがとうございます。特に企画デザイン科に関しましては、色々やりながら考えているところも正直ございますが、想定される進路ということに関しましては、企画デザイン科だけではなく、産業高校というところから就職希望者が多いだろうということは、他の学科も含めて想定はしております。

企画デザイン科に関しては先ほどお話ししました通り、地域のデザインを考えるということも想定していましたので、大学に進学する、そして大学も様々な分野が考えられていて、本校で学ぶデザインをさらに専門的に学ぶということもありますし、地域を活性化するというような部分では、多くの学部学科が考えられると思っております。また私立大学では、新しい名前の学科ができていますので、そういったところも視野に入るのはと考えています。

それから、地域を活性化するという本当にシンプルなところで述べますと、市町村の役場などに就業する公務員ということも想定しているところでございます。

それから、農業科学科や総合ビジネス科に関しましては、就職が多くはなると思いますし、専門を活かした就職になるかとは思いますが。特に総合ビジネス科の生徒たちは事務職を目指すという生徒が多くなってきているのではと思っていますのでございます。

2点目の企画デザイン科の本校での最終目標ではありますけれども、やはり地域を活性化させるような企画を最終的にはグループ単位とか、そういった単位で作って、それを関係者に発表して、企画を採用していただけるかどうか

か、あるいは企画に対しての課題を出していただき、ブラッシュアップしていくところまでできればと考えております。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。もう1点、1年生225名は、皆さん通学されているのでしょうか。

校長 伊藤直美

そうです。全員通学しております。資料の2ページ目の右上に出身圏域別生徒数がございます。主に大河原教育事務所管内であり、そこが圧倒的に多くなっています。また、仙台教育事務所管内からの通学者もおり、名取、岩沼、亘理を含めたところ、あるいは仙台市を取り囲むようにある利府や大沢といったところからも通学しております。それから仙台市立の中学校からも15名おります。その他というのは石巻から通っている生徒で、企画デザイン科を希望してくれた生徒です。おそらく始発の仙石線に乗り通学してくれています。本校は立地条件の非常に良いところは大河原駅から歩いて15分程度で登校できるということですので。やはり電車を利用して通学できるということは、非常に良い条件になっていると思います。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。それでは徳能委員からコメントや感想等をお願いします。

徳能委員

はい、今日は本当にありがとうございました。私はとても楽しく見させていただきました。何よりも生徒たちがすごく生き生きと、とても自信たっぷりに授業を受けている姿を見て、新しい学校の力をとても感じました。それから、柴田農林高校と大河原商業高校の遺伝子をきちんと引き継ぐような取り組みが様々なところでなされているというのが、本当に良かったなと思います。閉校してしまう2校があるわけですが、その生徒たちが、最後まで自分のやっていることに意味や意義を見出し、そして、新しい学校の後輩たちと部活や授業などを通し、しっかりと絆を繋いでいくことが、何よりも素晴らしいことだと思います。これからまた、大崎にも新しい学校ができるかと思いますが、ぜひ、各校の遺伝子を受け継いでいくことを大事にしてほしいと思いました。

また、先ほど校長先生から交通の面の良さという話がありましたが、やはり立地条件は大切だと思います。興味はあっても、やはり物理的に通学できないということでは、せっかく県内に1つしかない企画デザイン科が設置されていても、宝の持ち腐れになってしまうと思います。幸い大河原産業高校は、駅から歩いて通学できるということで、夢を諦めないで通うことができている生徒もいて、遠くから早起きしてでも通いたいと思う学科がやはり選ばれているだろうと思います。

これからのことを考えると、今回、農業科学科の方が定員を残念ながら満たすことができなかつたという資料にあります。立派な設備等があり、本当に良い学習環境の中で、ぜひ農業の学びの息を吹き返してもらい、大河原産業高校はすごく人気があるのだというモデルになってほしいと個人的に思います。

感想だけになってしまいましたが、本当に生徒たちの生き生きとした姿を見ると、とても今後のこの学校の行き末が楽しみに思いました。ありがとうございました。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。最初に発言していただいたので、様々なことが頭を駆け巡ったと思います。ぜひこの後もよろしくお願いします。それでは小嶋委員からお願いいたします。

小嶋委員

はい、本日は様々な施設や授業を見せていただきありがとうございました。良

い意味でびっくりしたところがありまして、多くの実践的な機器が入っているということです。

また、学科間連携においては、農業と企画デザインとの連携で唐辛子の話がありましたけれども、先ほど、総合ビジネス科の進路として事務系が多くなるのではという話がありました。唐辛子の開発については、まさに原価計算ですので、そういうところをしっかりとできるのであれば、3科連携して大きな夢、それぞれ起業じゃないですけども、3科の職員が、高校生のビジネスをやりたいというようなことも1つの形としてはあるのではないかと思いながら聞いておりました。

同様に地域との連携ですが、先ほど大河原地方振興事務所の話をしていただきましたけれども、例えば、私が以前所属していた食べ物の方の課からすれば、その事業の中でいわゆるそのプロのマーケティングの方に食品製造事業者の補助金に対してアドバイスをもらう機会とかがあります。外部の方の講演をという話ありましたので、例えばそういう方を大河原地方振興事務所でもいいですし、私でもいいですし、そういう繋がりや、より社会に向けた実践的な繋がりというのを今おられる様々な委員のご協力の中でできるのかなというところがありました。

また、機械機器の方は、例えば、その林業の菌床の部分については、七ツ森などで行っている事業者が多くおられますので、そのような所への就職もできるかなと思いました。それから、企画デザイン科の動画編集を見せていただいたところなどは、やはり一般企業に入った時、今どの事業者でも人手不足も含めて、社風や商材などの企業アピールというのは、すごく大事なことだと思っているので、そういうところの力になっていただけないかと思っています。

私自身が今の職場で難しいなと思っているのは、今回皆さんにお配りしたオガールの4ページに掲載しています宍戸さんの話で、やはりそうだなと思ったのは、一番下の段で「生まれ育った町にある会社ですが」というフレーズの部分で、「実は存在を知らなかった」という。これが今の仕事の中で、私の一番やらなければいけないところだけでも、届いていないところだなと思っております。そういう面で地域連携の中で、この地域にある様々な企業や地方振興事務所等の関わりが上手く繋がっていったらいいのかなと考えるところでありました。

そこで先ほど徳能委員がおっしゃった通り、卒業生がそれぞれの地域に入って、活躍していくということが出てくれば、ここの学校に入りたいという生徒も増えてくるのではと思いますし、仙南地域2市7町があり、この審議会テーマである少子化という観点からすれば、間違いなく七ヶ宿や川崎町は行政の動かし方としても、今、非常に町の方々も悩んでおられます。少人数で様々な仕事をしなければならないところがあります。しかし一方で七ヶ宿などは、町の外から来られた方、県外から来られた方のお子さんが確か35名くらい保育所に通所しており、小中学校も確か100名近くに増えてきています。活力のある地域の方々や大河原産業高校との地域連携が進み、今後、若者の活躍の場としてもあるのかなと思っておりました。

最後に、先日TVで見たのですが、大阪シティ信用金庫が間に入り、年1回47都道府県の高校生がそれぞれの地域の様々なものを販売するイベントがあるそうです。高校生が地域に出ることによって、地域の方々はやはり集まるようです。そして案の定、すべて完売というニュースが放映されていました。高校生の活躍というのは、これまでもそうですけれども、これからも非常に期待のできる場所が多いのかなと思います。ぜひ私も楽しみに大河原産業高校を注目していきますので、頑張ってくださいと思います。以上です。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。コメントや感想などを話してもらった後、御意見や提案、質問等でその場で確認したいことがあれば、答えてもらうということにし、一通り皆さんからお話しいただいた上で、討論していければと思います。では、後藤委員からお願いします。

後藤委員

はい、今日は見学させていただきありがとうございます。私からは、先ほど冒頭で委員長からデザイン科を卒業した生徒たちがどういう進路の方向を考えているのかという点について、校長先生にお答えいただいたところですが、逆に生徒自身は、将来のビジョンや目標をどのように抱いて入学してきているのか、一生懸命に動画作っていたりする中で、その先に見据えているものがあるのかを聞かせていただきたいことが1点目です。

それから2点目に、学校要覧を拝見しましたが、すべてを見ていない中での確認になるのですが、校訓ということで、「自立貢献」とはっきり掲げられています。そこで、「自ら考え、行動できる精神的強さ」とあり、自分たちで考えて行動したことが、社会貢献になるというようなことが受け継がれていくのかなと思う中で、ここに精神的強さというフレーズにどのような意味があるのか、それを生徒たちは授業の中でどのように意識しているのか、もし差し支えがなければ少しだけお聞かせいただければと思います。以上2点です。

議長 伊藤会長

今の2点について先に回答していただけますか。1点目が、生徒たちが将来のデザインをどのようにイメージしたり、考えたりしてこちらに入学したか、分かっている範囲でお願いします。

校長 伊藤直美

はい、将来のビジョンを具体的に持ってという生徒は、そんなにはいないと思いますが、学んだことを仕事にできればいいなという漠然としたイメージは持っているかと思います。現状は、高校で学んだ技術を就職に活かすという部分では、ハードルが高いのかなと思っていますし、そういう話も少ししております。絵を描くのが好きでとか、そういうデザインやってみたいということで入学するというのが多いのかなと思っています。

あと、御覧いただいて気づかれたかと思いますが、女子生徒が圧倒的に多いです。企画デザイン科では男子は5名です。そのような中で、次の進路としては、就職あるいはその専門学校への進学ということをイメージしている生徒が現状では多いのではと思っています。

1年生中心になっていますけども、今後、地域に出て、実践的なデザインをやっていく中で、そのような学びを活用していけるような進学、あるいは就職においても、会社の中でデザインに関わるような部門での仕事ということも目指してほしいと考えているところでございます。

それから自立貢献ですが、自ら考え、行動できる精神的強さというところは、やはり現代の高校生、どうしても気持ちが優しい子供が多いという印象であり、その優しいというところはとても良いことではありますが、一步を踏み出せない、勇気が足りないというような子供が多いのではないかなと思っています。本校の活動の中で、例えば、その学科間連携の狙いの1つとしては、実際に社会に出た時に、例えば組織には様々な部署があり、それぞれの専門の部署が連携をして組織を構築し、運営していくかと思っています。一緒に協働するということが今後ますます重要になり、専門をしっかり学び活かすという部分と他の専門性を持った人、あるいは他の仕事の専門家とも一緒に話し合いをしながらやっていくということが大事になっていくと思っています。学校ではそういったことを、話し合いなどを通じて信頼関係を作っていく、自己の気持ちを安定させられるような精神的にも強くなっていくことを目指していきたいというように思っています。

議長 伊藤会長

よろしいですか。ありがとうございます。それでは山内委員お願いします。

山内委員

本日は御案内いただきありがとうございます。生徒たちが本当に楽しそうに取り組んでいる姿を見られて、本当に良かったなと思っています。今日改めて新しい設備など拝見させていただいて、例えば学校林から木を切ってきて、作っていくところ、さらにそこにパッケージのデザインを付けて、そして販売していくところまでのカリキュラムが、農業、デザイン、ビジネスと連携して10年、20年と行っている間に地域商社みたいなものを実現できるのではないかと感じました。

このカリキュラムですが、教科横断的と言いますか、例えば、総合的な探究の時間のところでもいいのですが、作っていただいたものを学科で連携して、円環を描いていくというふうなことを取り組んでいくようになるだろうなと思い、地域商社のような形で入り口から出口までを行っていくことは、学校のアピールになるだろうと思って拝見していました。

また、すごく空間と言いますか、設計の方の力もあるかなと思うのですが、学校で産直ができるなと思いました。説明をお聞きし、ここで物を売ったり、文化祭をやったりするというような、様々な新しい挑戦や発想、販売していくためとか、あるいはデザインしていくためとか、ここで家族が楽しめそうだなとか、様々な発想をすることができる空間が実現でき、様々な実験をする空間として、場所が使えるそうだなというのが思い浮かびました。

この空間利用の在り方として自由に使わせてあげて、様々な発想でもって、自分たちで考えたアイデアで販売や展示をいつでも見せていくことができると思いました。多くの学校を見ていると自己肯定感が低いみたいなこと言われていますが、自分の表現したデザインに対して「これいいね」、「もうちょっとこうしたらいいかもしれない」という環境があれば、その中で新しい商品が生まれると思います。皆でアイデアを出して、皆で発表できるような、そういう自由な空間がたくさんあると活性化できるのではないかと思います。学校として勉強もするけれども、様々な人との繋がり、ビジネス学んでいる友達やデザインを学んでいる友達などと人間関係を作っていく基盤としても機能を果たすなど様々な可能性があると思いつきながら拝見しておりました。

それから先ほどジェンダーバランスと言いますか、女子生徒が非常に多いということでしたが、柴田農林高校の比率と大河原産業高校の比率はどのくらい違うのか御存じであれば教えていただきたいと思いました。つまり柴田農林高校では農業を継ぐ長男の子が多いのかなということ漠然とされていて、卒業後は地元で根付いていくのだろうかとか、デザインを学んでいる生徒たちは、女子生徒が多かったですけれども、将来、この地域に根付いてくれるかなど、その地域的な根付きというものが若干気になったところとございまして、御存知であれば伺いたいと思っております。ひとまず以上です。ありがとうございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。デザインや空間利用のことは、この後、関連する話がいくつか出てくるかもしれませんが、後ほど議論できればと思います。

あと柴田農林高校との生徒のジェンダーバランスなど分かっているならば、もし分からなければ後で確認の上、情報を提供いただきたいと思います。分かりますか。

校長 伊藤直美

はい、本校生徒の男女比率は、学校要覧の13ページに記載がありまして、農業科学科は男女半々ぐらいの割合なのですが、企画デザイン科は男子5名で、女子35名です。総合ビジネス科も比率で言うと、女子の方が多めとなっております。柴田農林高校の資料は手元にないのですが、おそらく柴田農林高校は学科に

はよりますが、相対的には男子の方が多いという感じがありますが、全部を合わせれば同じぐらいかと思います。そこは確認したいと思います。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。続いて佐藤委員からお願いします。

佐藤委員

はい、本日はありがとうございました。先ほど山内委員がおっしゃっていたように広い空間が確保され、開放的で私が高校生だったらここで勉強したいなと思いました。また、プロダクトデザインのルームも色違いの椅子が配置され、創造性が高いと感じました。できれば机も用途に合わせて変形できるデザインだったらより良かったのかなと思っておりました。

私の質問は、先ほどの小嶋委員からの質問と重複するところもありますが、農業科で製品を作って、そして企画デザイン科でデザインという付加価値を付けて、それを総合ビジネス科で販売していくという連携ができていているということですけれども、やはり最終的には収益を伴ったビジネスモデルをどう構築するかを考えていかなければならないと思います。昇降口で生徒が作ったジャムを300円で販売していましたが、300円では安過ぎると個人的には思いますし、もっと付加価値を付けて販売することで、他社との差別化を図り、売上を伸ばしていく必要があります。実際の店舗では、700円、800円で販売しているわけで、そこはまさにビジネスであり、高校生のうちからそのようなビジネスマインドを身に付けることは重要です。机上の空論というようになってしまってもったいないと感じました。

最近はビジネスコンテストに参加する大学生も増えていますが、活動の様子を見ていても、結局、資金をどのように調達し、どのようにして収益化していくのかというモデルが見えないということはよくありますので、高校生のうちからそのような考えを身に付けることができれば良いと思いました。その点については、どのようにお考えでしょうか。

校長 伊藤直美

どうもありがとうございます。今現在のところ総合ビジネス科の関りは弱いところはございます。しかし今後、御指摘をいただいた通り、ビジネスとしての成立をどのように考えていけばいいのかを学科を超えて検討しなければならないと思っています。そのような展開を次年度以降やれたらと思います。

実際、農業科は生産物を販売しているわけですが、まず人件費などの諸経費を考えないでいいといったところで安価にはなっているものの、実際にそこにはどれくらい人件費を計上すべきかなど考えられるようにしなければいけないなど、今のお話も伺いながらイメージしたところでございます。ありがとうございます。

後藤委員

すみません、今の補足で、先ほど野菜をというところで質問した時に、値段について、どのような基準で、誰が設定しているのかを販売していた先生に質問したら、今のところは原価計算までは行っていないけれども、生徒たちはスーパーを回って、あそこのスーパーではいくらだったよということを実際に見てきて値段を決めているということでした。なかなか原価計算というものに結びついていないということだけでも、生徒たちはスーパー行ったらすぐ意識しているのだということで、少しずつではあるものの原価意識が根付いていると思いますので、補足で失礼しました。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。それでは続いて加藤委員お願いいたします。

加藤委員

はい、私は専門学校の担当なので、本当にこの環境が素晴らしいなと思い、羨ましくてしょうがないという気持ちでした。特にグラフィックでホテルのマー

クを作成していましたが、その様子を拝見し、もっとホテルの勉強をさせてほしいなと思いました。なぜなら、先生たち本当に大変だなと思っています。この学科連携をするにあたって、やはり先生たちがその地域とどう関わるかとか、先生たちが様々な産業のことを知っていないと、子供たちに伝えていくことがなかなかできないだろうなと思いました。そういった知見をどのように得ているのかをまず質問してみたいと思いました。ぜひ、1つのデザインならデザインを通して、その地域の産業についてもっと深く知ることのできるカリキュラムにしていだけたらいいのではと思いました。大河原だけに収まらずに日本中に広げていっていただけたらと思います。

もう1つ質問ですが、おそらく生徒の学力がだいぶ違うのではないかと考えているのですが、学力の違う子供たちをどのように指導しているのですか。イラストレーターなど難しい内容のものをやっていると思うのですが、学力とデザイン力というのはまた違うと思いますし、進路決定していく上で専門学校を選ぶときにも、「あなたのこういったところが活かせるね」ということも考えられると思いますが、授業の中でどのような評価をこの学校でされているのかのお話を聞かせてください。

議長 伊藤会長

はい、どちらも非常に貴重な質問かと思います。特に最初の授業を行うにあたり、担当する先生たちが扱う産業のことを十分に熟知しているかいないかで、おそらく伝え方も違ってくるものだと感じました。だからこそ熟知していなければならぬということではなく、その際には、ない部分は連携すればいいことだと思います。そういったことが今後、検討することになっていくのかと、それが1点目です。

2点目が学力の違いについてです。入学試験はあるのでしょうけど、おそらくデザインにしる、今までと違ったところに興味関心を持っている生徒が集まってきて、学力とは違う部分で、ここはスキルを伸ばそうというところなので、そういったところの評価をどうするのだろう。今、大学では絶対評価ではなく、相対評価にして、全員90点以上でも正規分布にしてA・B・Cを付けるように言われています。そういった評価もやはり学生が目線ないしは、その出口の人の目線で見たらどうなっているのだろうという意図もあるだろうと思います。答えられる範囲でお願いします。

校長 伊藤直美

はい、1点目について、まずお答えになるかどうかですが、教員たちが地域をどう捉えているかとか、どれぐらい熟知しているかということに関しましては、個人差はあると思いますし、今回このような学校で勤務することになり、実は先生方も生徒と一緒に勉強しながら授業をしています。地元出身の者もおりますが、必ずしも全員ではないですし、地域のことを意識するということがなかった世代かもしれませんので、これから地域に対する知見を広げていくようになるのかと思っています。しかし、大変興味を持って、あるいは私も含めて、これまで知らなかったこの県南地域の素晴らしさや人々の取り組みというのをさらに広げるとか、バージョンアップするということで、取り組んでいこうと考えているところがございます。評価については、教頭から詳しく説明いたします。

教頭 大澤健史

教頭の大澤でございます。評価につきましては、クラスの中でもやはり学力差があります。日頃の授業につきましては、当然全員に同じ授業を展開しておりますので、その授業のねらいで、ここまでできた時には真ん中の評価を与えましょうとか、それを超えた時には、さらに上の評価を与えましょうというように、学校の教科の中で基準を設けながら、評価をしております。しかし、難しいのはお話いただいたデザイン関係の評価です。やはり難しいところがございまして、ただ全体を見て良い、悪いという話ではなく、学んだところを活用できているかど

うかというところを評価基準として試行錯誤しながらも設定しながら、生徒たちに説明できるような評価の仕方をしているところでございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。評価は難しいと思います。それでは続いて高橋委員お願いします。

高橋委員

はい、キーワードとして連携ということテーマとして取り組んでいるというのは大変素晴らしいと思いましたが、そこがうまく埋め込まれたプログラムだなと思っています。なぜかという、私も農業団体に所属していますが、連携すると簡単に言いますが結構パワーが必要です。考え抜いてから企画を起こしますので、すごくパワーが必要で、私も職員を抱えています、今までは連携ができる人間は個性なのかなと思っていました。もしかすると10代半ばぐらいで、こういった教育プログラムを受けた人間が、もっと力を発揮できるのではないかという感想を得ました。そういった意味では、連携というキーワードで教育活動が行われていることは大変良いと思いましたが、今後も重要キーワードとしていければなと思っております。

前年実施したから今年もできるという分野が少なくなってきました。職でもそうですし、多くの現場もそうです。農業者においても、常に新しいことを感じて、企画して、実施するというルーティンをやっていかなければならないので、知識は当然ですが、知識以外の考える能力を身に付けられるよう展開しているところが素晴らしいと思いましたが。

2点質問ですが、まず1点、農業分野のカリキュラムですが、先ほど椎茸や木工の施設を見せてもらいましたが、林産系と言いますか、なぜ菌床なのかなと思いましたが。また木工分野の加工を学習していることも何かマーケット的にあつてということなのか、また、畜産のプログラムを見つけられなかったのですが、本県の1/3は畜産で販売高を構成しているので、林産が入って畜産がないってないという組み立て方の背景を教えてくださいなと思います。もう1点は、デザインの授業でパソコンがMacベースでしたが、Windowsのパソコンでの学習はあるのか教えてくださいなと思います。

校長 伊藤直美

ありがとうございます。まず、資料の3ページにカリキュラムの詳細を掲載しております、農業科学科の2年次に専攻分野によって、食農科学科と環境科学科に分かれる教育過程になっております。先ほど御覧いただいた、森林の部分の実習室なりは、2年生から実際に活用していくようになります。なぜキノコなのかという御質問ですが、数的なところは把握しきれていないのですが、林産という分野、その森林とか林業を学ぶ上での林産という部分もしっかり勉強をさせたいという思いがあります。また実際の現場で、従来のような楢木栽培というようなこともやっておりますし、そういったシイタケの方が良いという好みの方もいらっしゃいますが、工業的な形での菌床栽培のきのこ工場というものも増えております。企業のCMもたくさん見かけており、そういったことも学習の一環として勉強させたいということで、立派な設備を整えていただいたということになっております。実際に材木を作る、あるいはその材木から木工品を作るといったことも学習の中にはありますが、実際の現場でそういった部分が増えていくという背景があります。

それから畜産に関しましては、柴田農林高校では畜産があり、和牛を中心とした学習をしております。今回、農業につきましては、元々のベースの柴田農林高校が4クラス4学科あったものが、2クラスに減少することに関連して、農業の職員も減らさなければいけない、また、県内でも県北を中心に畜産が盛んであり、県南においても畜産を運営しているところがあることは承知しております。学習部門としては非常に重要ですが、総合的に考えて、どうしても減らさざるを

得なかったということでございます。しかし、これは私の中での考えではありますが、今後、県内の農業を学ぶ部分において、どうしても病気の問題などがあり設備の嚴重さということが要求されます。そういった中で、現在、県内農業高校で畜産の学びをしているところは、登米総合産業高校、小牛田農林高校、加美農業高校、宮城県農業高校でございますが、何か本校の中でも将来その畜産に少し興味があるとか、畜産分野も少し触れてみたいとか、そういった生徒からの需要がある場合には関連の学校に短期的な講習に行くなどで対応できないかと、私の個人的な頭の中ではありますけれども考えているところでございます。

一方、森林分野の学びは柴田農林高校と本校独自のものとございますので、森林分野の学びを経験してみたいというような他校の生徒がいたら、受け入れられるような仕組みづくりということもできないかと考えています。

それからマッキントッシュのコンピュータですが、生徒たちは、御覧いただいた授業とは別に情報処理という授業があり、そちらで Windows のコンピュータに触れますので、両方を使いこなせると思います。以上でございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。よろしいですか。それでは三浦委員お願いします。

三浦委員

はい、本日は新しい校舎の見学をさせていただきまして、ありがとうございます。県内で一番充実した設備のある学校だと感じました。農業科学科そして、企画デザイン科、総合ビジネス科の3科を見させていただきまされたけれども、どの学科においても1年生ということで、これから、学年が上がるにつれ様々な勉強がなされていくのだろうと感じました。

私は漁業関係なので、農業等のことはあまり詳しく分からない部分もありますが、ものを作り、育て、そして販売していくということは、農業においても漁業においても同じだろうと考えています。できれば、このような素晴らしい学校なので、生徒の皆さんには、この3年間を自由な発想を持って、学んでほしいと思っております。

また、3学科の連携ですが、産業的に見ると6次産業化に向けた取組がなされるように感じましたし、そういう学びが行われるという希望を持ちました。

あとは委員の皆さんの様々なお話、御意見を伺っていただきましたので、私からは感じたことをお話しさせていただきました。以上です。ありがとうございました。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。御意見等を一通り伺いましたが、他にありましたらお話しいただければと思います。時間も迫っていますが、今お聞きした意見で、今後、大河原産業高校を運営する上で考えたらどうかという点は、先ほど山内委員からもあった空間の利用の仕方だと思います。やはり1階のエントランスはとても良い空間で、同じような空間は東北大学にもありますが、活用しきれていません。デザインとの関係で言うと、あそこの空間をどう使うかということは生徒自身のデザイン発想でもあります。しかし、地域との連携ということも非常に強く意識しています。それは、教員それから教育委員会、教育庁の皆さんの考えというのは少し置いておいて、空間を実際に利用してする人、利用してほしい人で空間をこんな風にデザインできたら面白いのではないかというのを考え、実現するような機会を作っていくのが大切だと思います。当然、そこには費用も必要になりますが、費用についてもできたら県費を使わずにやれることを考えられたらいいのではと思います。

その中で直売の話もありましたが、以前お話ししたかもしれませんが、オランダで、今の2代前の女王の誕生日は、子供たちが軒先で物を売ることができるというものがあり、やっぱりオランダの人たちは、小さい頃からそうやってビジネスというものを身に付けているのだと思いました。そこでは使い古しの中古品をやり取りするわけです。この話しをしていたら、山形の中学校だったと思いま

すが、修学旅行で関西に行く時に空き店舗を借りて、1日だけですが、山形の特産品を持参して販売し、それでその店舗の経費や仕入れた分の材料費、次の活動経費等を全部賄うということでした。そういったことが大河原産業高校でもできるような仕掛けは必要になってくると感じました。ただ、それを1個1個やるのではなく、確か登米総合産業高校は、運営を地域のアドバイザーが入って高校の運営をやられていたかと思います。先ほどの説明の中でもあったように、大河原にいるから株式会社ヒルズとか、あと菓匠三全もあるでしょうし、名取にはキリンビールが、角田にはJAのシンケンファクトリーが、柴田町には山崎製パンがあったり、岩沼には日本製紙があったりと様々な企業あります。そういったところと連携することもいいと思います。

今、企業は、何もしていないでいると労働力が縮小して、どうしても海外人材に頼らざるを得なくなっています。その中でマニュアルを作ろうとか一生懸命いろんなことを取り組んでいます。地元で産業について学んで、その能力を地元で発揮できる人材がいますと、そういう人材に先行投資のような形で、費用を企業が負担して、運営にもアイデアを出しながら、例えば、生徒たちが今何をやっていて、どういう生徒がいるのかというのを見てもらうのもいいかもしれません。生徒と企業のコミュニケーションを図る機会をそれぞれ大河原産業高校の空間を利用することで機会を作り、お互いが求めているものが徐々に見えてくると思います。学校側では、様々なスキルや知識を提供できる人材が不足していると伝えれば企業から来てくれるだろうし、企業にインターンシップなどによって現場に行くことで、求められている人材が見えてくると思います。

これから急ピッチになるのかもしれないですけど、取組を仕掛けていくと社会からの要請と、ここの学校に入学したいと思う魅力が増してくるのではと思います。それで、そういった産業界と繋ぐのは、むしろここにいる委員の先生たちから紹介してもらい、一緒になって動いてもらえばいいと思います。

その先に行くと、優秀な生徒に奨学金を出すという取組に繋がることもあるでしょうし、また、地振の話聞いたとき、以前から農業高校を見ていると、大河原産業高校は交通の利便性が良いので、考えなくてもいいかもしれませんが、不便なところは全寮制にしたらという提案をしています。なかなか簡単ではないとは思いますが、近くにたくさん民家がありますので、地元の人に「大河原産業高校って面白いよね」というのが地域の中に根付くためには、例えば大河原産業高校で10数年かけて、この地域のお祭りだと言われるようなことを仕掛けてはどうかと思います。そういった形が10年、20年と続いていくと卒業生のネットワークも広がっていき、地域の中でもしっかりと認知されていくのだらうと思います。先の販売も例えば、知事の誕生日には、生徒は何でも売っていいよとか、様々な名目付けながら、知事にも来てもらったりすることでも、おそらく生徒のモチベーションはかなり上がると思います。あとは私の感想で、大河原産業高校の校歌をまだ聞いたことないのですが、作曲が秩父英里さんということで、すごいなと思いますし、こういった魅力をもっと発信するののだらうと感じました。

若干まとめたような形になってしまいましたが、どなたか他に御意見ございませんか。

徳能委員

はい、インターンシップの話がありましたが、この行事の中に地域探究プロジェクトと大河原産業高校では設定しているのだと思いますが、12月にフィールドワークというのがあり、その内容についてと、あと就業体験を実施すると思われるのですが、何か新しい取組や伊藤会長からの話にあったような取組があるのかどうかを教えていただきたいと思いました。

校長 伊藤直美

ありがとうございます。地域の中に出て行くといったことでは、資料2ページ

の主な行事として記載していますが、12月に1年生がフィールドワークを行いました。総合的な探究の時間を3年間かけて、地域の活性化策を考えるというのですが、まずは自分たちが考えた疑問点について、地域や現場に出向いて聞いてみようというようなことで、4、5人ほどのグループになり、地域に出向いて現場の人たちにインタビューするというフィールドワークを行いました。また、地域の人に来校していただいておりますというのでは、先ほどのもちぶた館ヒルズに協力をいただき、お話を伺ったり、現場を見させていただいたりということを特に企画デザイン科を中心に行っています。それから、今後予定しているものとして、資料の5ページになりますが、アイリスオーヤマとの連携を相談申し上げたところ快くお引き受けいただきました。御存知のとおりアイリスオーヤマは、経営戦略として様々なアイデア出しや組織としても積極的な海外展開しているというようなことを企業体として見せていただくというようなことと、仕事ぶりということも参考にさせていただきたいと考えており、2月に講話あるいは工場見学を予定しております。それからインターンシップについては、現在検討中でございます。実施できたらと考えておりますが、具体的などころは今後詰めていくようになるかと思っております。

山内委員

私は教育大学に所属しているものですから、学校間連携というものをお考えではないかなと思っております。震災前、私自身、木工の総合学習授業を南三陸町で実施してきていて、山で木を伐採して馬で下ろして、街の製材所で部材を切ってもらって、それで学校の中で木工の本箱を作るところまでの一連の作業を学校林で実施したということがありました。

例えば、大河原産業高校にも設備が整っていることから、町内の小学校や中学校との連携ができるのではと思っておりました。産業高校ならではの取組ができるような気がします。これはおそらく普通科の高校では絶対にできないことだと思っております。以上です。

議長 伊藤会長

貴重な情報ありがとうございました。他いかがでしょうか。おそらく探せばいくらかでもあると思っております。本学の修士を得た卒業生も秋田に戻って菌床椎茸に取り組んだのですが、ビジネスはどうなっているかあまり聞こえてはこないのですが、彼は使い終わった廃棄菌床を使ってカブトムシの飼育をしているようで、1匹数万円のヘラクレスとかを飼育しているということで今、世界中のマニアの中で有名になっているみたいです。ただ、それで終わらないで、今度はそのカブトムシの糞を堆肥にして、地元の中学生に農園で野菜を作ってもらい、それを自ら売っているという循環をしっかりと社会に根付かせるということをやっております。おそらく、そういったことができる余地はたくさんあり、そこはまさにデザインや農業科学科というあたりの繋がりになると思っております。

あとは大河原産業高校の特徴として、ビジネスとして地域との連携を全員が共通認識できる機会をどのように設けるべきか考えていかなければならないと思っております。アイリスオーヤマと連携した際、会長の大山健太郎さんは、地域連携等の話をするのが大好きだと思います。やはり年に1回、来校してもらい新入生なり、全校生徒なりに話をしてもらおうと、何となく生徒たちも変なおじさんだなど思いながら、家に帰ってからとんでもない人だよと言われると思うので、そういうことを通じて緊張感を持ったりすることも必要なかなと思っております。そういった人たちに積極的に関わってもらおうことが大事じゃないかなと思っております。

まだ御意見があるかと思っておりますが、そろそろ時間ですので、これで皆さんから御意見いただいたこととして、あとは議事録を整理していただき、皆さんに報告し、確認していただくというような段取りになるかと思っております。

それではよろしいでしょうか。ありがとうございます。では、進行を事務局に返

します。どうもありがとうございました。

事務局 伊藤総括

ありがとうございました。では、次回の審議会についてお願いいたします。

事務局 佐々木

まずは本日、貴重な御意見を頂戴いたしまして誠にありがとうございました。次回の第3回審議会についてですが、2月14日水曜日、場所は県庁を予定しておりますが、特に大学におかれましては、卒論の発表会等があると聞いております。日程につきましては、改めて調整させていただきたいと思っております。

また本日も審議において発言しきれなかったことやお気づきの点がございましたら、お配りしました意見用紙に御記入の上、12月28日木曜日まで、ファクシミリまたはメールでお送りいただきますようお願いいたします。以上でございます。

校長 伊藤直美

すみません。先ほど質問がありました柴田農林高校の男女構成についてですが、確認できまして、現在、男子119名、女子78名の在籍であり、男子が多いということでした。

事務局 伊藤総括

その他、何かございますか。よろしいでしょうか。

それでは、本日は貴重な御意見をいただきまして、ありがとうございました。以上もちまして、令和5年度第2回宮城県産業教育審議会を閉じさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。